

## 近代に確立された 日本の歴史認識を 今問いなおす

李先生が担当しているのは「日本・アジア関係史」と「東アジア社会文化論Ⅱ」。

「私の授業やゼミでは、『東アジアの中の韓国・朝鮮』という視点を持ち、韓国・朝鮮の地域を中心に東アジア諸地域社会を勉強します。「日本・アジア関係史」はタテの時間軸。「東アジア社会文化論Ⅱ」は、いわばヨコ軸です。日本との関係、宗教、文化、朝鮮半島の分断などいくつか

アジアのなかの日本。  
新しい世代の若者がそが  
お互いに理解を深めて  
真に対等な関係をつくっていく

サッカーの日韓共同開催、韓流ブームのなかでの韓国への熱い憧れ。戦争の時代に起きたさまざまな悲劇は60年以上たって、やっと少しずつ思いがけない流れで、雪解けがはじまった。民衆の暮らしを追いかけてながら国境を越えて、歴史と社会を縦横につなぐ李先生は学生たちを見守り続ける優しいお母さん役。

のキーワードがありますが、社会的なさまざまな観点から、東アジアにおける関係性について考えていきます」

若者にとって、歴史を、それも近代史を学ぶことがとても大事だとおっしゃっている李先生。それはなぜなのか、というところ。

「今の学問の中身というのは、ほとんどが近代において確立されています。たとえば、日本の明治から戦前までにまとめられた古代の歴史というの、全部が故意に作られたものとは言えないけれど、じつはその時代の政治に都合のいいものになって

いるのです」

中世にはたしかに豊臣秀吉による「文禄・慶長の役」出兵という侵略行為はあったが、江戸時代にはいると、幕府と朝鮮との間には「朝鮮通信史」による対等な外交関係があったのだ。

「ところがこうした事実を植民地にするのに都合が悪いので意識して隠されました。古代に朝鮮を日本が支配していたことにする。だから近代だけでなく、近世、江戸時代の史実からも学ぶ意義があります。今では歴史研究自体も相当進んでいますので」

1945年の日本の敗戦以降、少しずつ歴史の見直しはされてきたが、じつは戦後の教科書でも長い間ずっと、「大昔、朝鮮は日本の隷属だった」と記述されていたのだという。20世紀後半から、やっと本格的に雪解けがはじまる。

そういえば「従軍慰安婦」問題でも、その事実自体は日本戦時期のことなのに、戦後になっても50年以上葬られたままだったのは、どうしてなのだろうか。

「総じていうと、国民国家として近代化に必死だったときには、相対化する作業はできなかったのでしょう



李 熒娘 (いひょんなん)

一橋大学大学院社会学研究科地域社会研究専攻博士課程。社会学博士。2005年より1年間ハーバード大学研究員。著書に『カトリックと文化—出会い・受容・変容』共著（中央大学出版部）『布施辰治と朝鮮』共著（高麗博物館）『東アジアの国民国家形成とジェンダー』共著（青木書店）『戦間期の東アジア国際政治』共著（中央大学出版部）

ね。21世紀になってからは、2002年のサッカーのワールドカップが、日韓の共同開催という形になりましたが、あれから江戸時代の日朝関係を日本と韓国の研究者と一緒に研究するという気運が、一気に高まったのです」

博士論文はお米の関係史。  
民衆の生活にこそ  
いちばん関心をもって

韓国では社会学を勉強していた李先生が、来日されたのは1981年。一橋大学に留学し、84年には日本で出産もされ、子育てしながらの学生生活を送る。

「最初は博士論文を書いたら帰ろうと思っていたのに、こうして日本で教えるようになって、今年でちょうど人生の半分が日本、ということになりました」と感慨深げに振り返る。

総合政策学部の講義では16世紀から現代までを担っているが、もともとのご自分の研究分野は朝鮮の被植

民地時代。博士論文のテーマは、侵略の時代における朝鮮のお米の研究、という異色なもの。

「当時、朝鮮で生産されたお米の半分は、日本にもってきています。もちろん日本の市場のためであり、消費のためです。朝鮮のお米の生産と流通過程をかき乱していたわけでは、なく、経済面でも行われていて、それがどうなっているのか、研究したかったのです」



女性史についての共同研究や、朝鮮民族の独立と人権擁護のためにも戦った弁護士「布施辰治」に関する研究なども。



30人ほどのゼミはとても家庭的な雰囲気。短期も含めて留学体験者も多い。

植民地時代の日  
朝関係の米の調査

をしていくと、朝鮮の米を市場に出すことによって日本の米の生産と流通もかき乱されてきた。それこそが植民地の矛盾。日本の生産者にも影響を与えてしまう。

「私が一番関心をもつのは、民衆はどう生活していたか、ということなのです。たとえば中国の東北地域の水田は、朝鮮人の耕作で行われていた。お米の生産地の北限を拡大したのは朝鮮人だったわけです。こうした事実からあらた

めて地域を見るとさらに興味がわいてきます」

李先生はそうしてやがて「在外朝鮮人の問題」へと研究を深めていく。

在外朝鮮人とは、在日朝鮮人だけでなく、在中国、そして在ロシアの人々も含まれる。どの移動もかつての日本の植民地時代がもたらしたものの。特にロシアでは戦前のスターリン時代の37年、沿海州の朝鮮人の人々が日本のスパイになるからと、中央アジアに強制移住させられた。現在のウズベキスタン、カザフスタンに住む朝鮮人はみなそうした歴史に翻弄されたのだという。

「沿海州の人々は、もともと植民地政策によって朝鮮から移動させられ、さらにシベリア鉄道に乗って故郷からはるか遠くに追われた。近代のディアスポラの象徴的なものなのです。歴史は多面的に学ばなければみえてこない」と、つくづく感じています」

※「離散」を意味するギリシヤ語。もとはパレスチナ以外の地に住むユダヤ人を指すが、政治的、宗教的な

理由で故郷を追われた他の民族にもつかわれる。

新しい時代の到来。  
学生たちはお互いに  
すぐ仲良くなれる。

李ゼミに入りたいという学生は、やはり韓国に興味のある学生が多いらしい。

朝鮮半島を軸に研究するのはいいけれど、できれば東アジアへの興味も広げてほしいと李先生は思っている。

「戦前は、福沢諭吉が言っていたように、日本は脱亜入欧を掲げていたでしょう？そして戦後は脱亜入米。日本はこれまで、決して「在亜」をしていないのです。アジアにないながら、アジアに追いつけ、追い越すことだけを夢見てきて、アジアに対しては優越感をもち、差別や軽蔑の意識をもっていった。今はある程度、ゆるくなつてはきていますが、それだけでは、日本のもともとの潜在能力を發揮できないと思います」



研究のよき相談相手でもあり、学生たちのお母さん役でもある李先生。

ます。アジアとの関係を変えていけるのは、まさにこれからですから」  
とくに李先生の世代までは、戦前の露骨な差別の体験をもつ親に育てられてきた世代、日本との関係を対等にするのは、お互いに無理だった

のだ。  
しかし、新しい時代は確実にやってきている。それはここ数年の韓流ブームにもはつきりと感じられる。「いろいろな理由があるけれど、この韓流のうねりは、すごい流れだと

思います。江戸時代には、朝鮮の文化使節に対して憧れもあった。でももしペヨンジュンが、30年前の日本に来てしまったらだめだったでしょう。なにしろ日本にはじめて来たとき、大学には朝鮮史の関連学部がなくて、私は日本史学科に所属するしかなかったのです。今はこの大学でも、韓国・朝鮮に関する学科は当たり前にありますから」

李ゼミでは、隔年程度で、韓国と大学との合同学習がある。学生たちが一緒に農村踏査をやったり、テーマを決めて、お互いに相手の国の言葉で発表をするのだ。

なので、韓国語は必修。

「私のなかでは日本も韓国も同じ。だからこそ、今の若者を、私たちの世代が育てていかなければ、と思っっているのです。今の学生たちはお互いにもすぐ仲良くなれるし、私の世代ができないことをきつとやってくれる」  
未来を育てる。学生が自分と向き合いながら成長していく過程を、李先生はその優しいまなざしですっと見守っている。

## 高校生の皆さんへ

自分が考えていることを自分で言葉にするには、いろいろな方法があるでしょう。勉強というのは、自分をどう見つめて生きていくかということにつながっていますが、私は歴史を知ることが、自分を育てることに必要だと思います。

今の社会を見るとときにも、歴史のなかで日本がどうやってきたか、過去がわからないと明日のことはわからない。

近代というのは、長い歴史のタームでみれば、つい昨日のことです。しかも私が教えている授業の中心は、日本とアジアの関係という、歴史研究の中でも一番面白い課題のひとつです。でも異文化に接することは、自分の国や自分を見つめ直すきっかけにもなります。

成長の仕方は、それぞれ違います。ひとりひとりが自分のテーマを決めて主体的に勉強していくなかで、社会のなかで自立していけるように、応援していきたいと思っています。